

男性の暴力－男性の責任

Lars H Gustafsson

1993 年春、Manlig の組織化が見られた。これは、男性の不法行為に対する窓口で、男性の暴力に対して抗議したいと考えている男性の全国的なネットワークであった。そのイニシアチブは、Rädda Barnen(子どもの保護)委員会の男性がとっている。私はそこに所属している。私たちはかなりの期間、様々な種類の不法行為についての詳細な情報を提供してきた。それは、以前のユーゴスラビアにおける子どものポルノと関係する子どもの性の売買、家族内で頻繁に起こる性的虐待、そして、女性や子どもに向けられる異様な暴力などについてである。そこにはある共通の特徴が目につく。それは、このような虐待をするのは、一般に男性だけであるということ。そして、それらの虐待に抗議するのは、一般に女性だけだということである。男性間の緊張した沈黙は支配的である。それはある面において、暗黙の共謀として解釈されるかもしれない。

私たちは、すべての男性が抵抗するように勇気づけるアピールを開始した。もう十分だ！その種の暴力は、非人間的であり、したがって男らしくない！

私たちは喜んで積極的に責任を受けとめる。男性のネットワークは、異なったワーキンググループで組織され、メディア班もそこに属している。だから私たちは、私たちのメッセージを表明するのに何の困難もない。このネットワークは、現在約 2000 人以上の男性からなっている。そして地域のグループは、世界中で発足している。

この議論によって引き起こされた波は昂揚し、それに対する反応は鈍くはない。私の視点から見れば、それらは私たち男性と男性問題について、多くのことを語っている。

抗議、分析、反対のイメージ

そのネットワークは、憤りの感情から自分自身を解放したいという願望から出発している。私たちは、男性はだれもみな、そのような犯罪を犯したくはないということを示したいのだ。私がラジオのインタビューで、「どうしてあなた方男性は、子どものポルノグラフィを楽しむことができるのですか」と尋ねられたとき、私は、「ほとんどの男性はそれを楽しみません。それを楽しむのは、おそらくほんのわずかの男性です」と答えた。

そう答えるのは、男性の反射的な対応であり、偽善的にみえるという大きな危険性がある。

る。しかし私たちは、子どものポルノグラフィーを楽しむような男性とは違う。私たちこそ「真」の男性である。したがって、痛みを伴うが必要である次のステップは、自分自身を厳しく問い直すことから始めることだ。そうだ。私たちのほとんどは、暴力あるいは児童虐待をしたことはない。しかしなぜ、そのような行為の加害者の男性という私たちの性はそれほど強調されるのであろうか。男性ということに、暴力や虐待に向かう傾向をつくり出す、生物学的な性質かあるいは文化的な何かがあるのだろうか。もしそうならば、私たちがそれに注意し、それと闘わねばならない共通の責任はどのようなものなのだろうか。

本来、その段階は多くの困難を伴う。大多数の男性は、自分たちが共通の経験と共通の責任意識を持つ男性として、一般化されることに大きな抵抗感を感じる。そうした男性観とは関係なく、ただ自分自身でありたいと考える男性もいる。自分は男性というよりもむしろ人間なのだと感じる男性もいる。また自分が、男性よりも女性に、より類似していると感じる人もいる。今日、男性性の描写が、女性に任せられる傾向にある。

第3の段階は、何に反対するのかということから、何のためにやるのかということへと、強調点を転換させることである。私たちは、暴力や虐待に反対している。しかし、私たちは何のために反対するのか？どんな反対のイメージが前向きなものとみなされるのか？何が「よい男らしさ」であり、また私たちは何のために立ち上がり、闘いたいのか？

私たちには展望が必要であるが、それらがもたらすかもしれないものに対する恐れもある。多くの男性は、私たちがそうありたい、あるいはそうなりたいという思いを述べようとする努力のすべてを拒否する。「私は、他の誰かに特別に進歩するようにいわれることなしに、自分自身でありたいのだ」というのが男性の共通の反応だ。確かにその背景には、伝統的な男性の役割が我々に強制してきた厳格な規範に対する嫌悪がある。願わくば、新しい固定的な役割と期待から自由になりたいものだ！解放は始まっている！男性はいつも自分の望むことを考え、好きなことをしてきたと思われているが、その結果は、必ずしも男性に自信をつけさせるものにはならなかった。おそらく男性への抑圧は、男性は暴力的だというようなイデオロギーだけの結果ではなく、むしろ、対話と熟考の不足によるのだろう。どちらの場合でも、私たちが一步を踏み出すのには良い機会である！

ワイルドな男の夢

議論の中にはさまざまなワイルドな男が登場する。Robert Bly の描く解放された最初の男性には熱心な支持者がいた。その他の人々は反対の立場から、彼を原始的で、融通の利かない男だとみなしていた。このような見解を支持していたのは、決して女性ではない！私としては、Richard Rohr の同名の本『ワイルドマン』（Rask & Rask）で彼が紹介してい

るワイルドな男を受け入れることは簡単であるということを見いだす。彼は、より立派に男らしく成長することを一連の旅と表現する。その旅の出発点は、母親の腕から飛び出したばかりで、しかも青年期における性的な偏りのために男性としてはまだ鍛えられていないという特徴を持った、若くて、大人になったばかりの「普通の男性」である。

Rohrによれば、この点から男性は、二つの旅を経験しなければならない。その最初は、女性への旅―「使徒ヨハネの旅」―である。男性は、もし彼があやまった男らしさ―マッチョマンの狭い世界―のうちに終わってしまうことを避けるべきであれば、彼自身の中にある女性性―世話をする男性―を取り戻さねばならない。女性性が獲得された時にのみ、彼は第二の旅、深遠な男らしさへの旅―「洗礼者ヨハネの旅」―を始めることができる。この荒野を横切る冒険の旅に踏み出す勇気のない男性は、あやまった女らしさ―同様に「新しい男」の狭い世界―にはまってしまうおそれがある。

Rohrはキリスト教のシンボルを使うが、誰もが彼の主張に従うわけではない。一つの旅が見落とされていると私は思う。それは、私たちの内なる子ども性への旅―遊びと空想を取り戻すことである。それは、深遠な男らしさへの旅以前に、どこかでやってくるものである。この時期は、(いつまでも少年でいるという)ピーターパン的な男らしさのうちにあるため、永遠に子どものままに留まってしまう流刑島に流される危険性がある。

この旅は、男性として、そして人間としてゆっくりと前進し、人生の矛盾した本質を受け入れられるように成長していくことを喩えている。私たちの中にある別の面が要求され、育まれるような状況の中に私たちが置かれれば、このような成長は最も容易にうながされる。子ども性への旅は、父親の役割や父性についての議論が始まる場である。男性の親子関係を豊かにしていくこと以上に、この過程をより強力に進める手段を想像することは困難である。現在、この手段はどのように組織されているのか。

しかし、こうした表現は議論上でのことだ。「女らしさ」や「私たちの中の子ども性」と言うべきでないと考える人もいる。私たちは男性である。そして、世話することや遊びを私たち自身、人間である男が備えるべきものの一部として見なすことは重要である。私たちは、私たち自身ということで十分であり、なにも他から借りる必要はない。

これらの精神的な旅は、1940年代に生まれた人々が、人生の早い時期に失ったものを探し求める、彼らの終わりのない遍歴だと考える人もいる。「私たち若い世代は、私たちが成長してきた時を40年代に生まれた人々の時代とは区別する。私たちは、どこへも旅する必要はない」。私はこのようなコメントを少しばかり心配している。親子関係が広まったこの時代における若い人々の成長は、40年代生まれの我々が体験してきた対立や妨害、常に新しい方向付けが必要とされていた状況から、それほど解放されているのだろう

か。

こうした男性と世代間における誠実な議論にこそ、未来への希望がある。

(田代美江子)